

## 『ぼくもわたしも梅の花 語りつぐ戦争体験』

日本児童文学者協会・日本子どもを守る会／編  
草土文化 (1979年)

親戚からも隠されて汚い真っ暗な蔵で一生を過ごし、死後もぞんざいに扱われたアメリカ人ハーフの女の子。戦地に着いた当日に中国人を日本刀で切るよう命じられ、次第に人殺しの感覚が分からなくなった憲兵。お話は突然終わります。その後どうなったのかも分かりません。ハッピーエンドはありません。でもそれが本当にあったことです。表題の「ぼくもわたしも梅の花」は、疎開先の子どもが母親へハガキを送る際に使った辛い気持ちを伝えるための暗号に由来しています。最後まで読んでください。

## 『死んでもブレストを』

早乙女 勝元／著 遠藤 てるよ／画  
草土文化 (1981年)

戦時中の電話といえば、家庭用の電話はめったになく、ダイヤルを回して電話局を呼び出し、相手方とつないでもらうことになります。交換手がとても重要な仕事をしていました。ブレストというのは、送受器のことです。ブレストは相手方の呼び出しを聞く受話器とこちらから連絡するための送話器からなっています。大災害が発生した場合、重要通信が切れたら大変なことになります。「死んでもブレストをはずすな」を合言葉に電話局とともに燃え尽きた交換手嬢たちのおはなしです。

## 『日本にも戦争があった』

七三一部隊元少年隊員の告白』

篠塚 良雄／著 高柳 美知子／著  
新日本出版社 (2004年)

著者の篠塚さんは15歳で幼馴染と共に軍隊に志願します。所属になった七三一部隊で待っていたのは、細菌兵器の開発や人体実験でした。

部隊がおこなった悪魔の所業を闇に葬らず、自ら戦争犯罪を告白して謝罪することで、二度とそのような道を歩まない国にしなければならない、という思いでこの本は書かれています。凄惨な当時の状況に心がえぐられますが、戦争の恐ろしさを知り平和への想いを強く持ち続ける為に目をそらしてはいけません。



## 『嵐の中の少女 中国少年が会った日本人』

石上 正夫／文 王 荻地／絵 あすなろ書房  
(1989年)

1921年に起こった満州事変がきっかけで日本に支配された中国。中国の人々は貧しくて苦しい生活を強いられました。そんな中、中国人の少年、来福と玉山は日本人の少女花子と出会います。花子とその家族はいままで見てきたどの日本人とも違い、当時差別されていた中国人にも親切で優しくかったです。しかし、戦争という大きな流れが彼らを襲います。中国人少年と美しい日本人少女ふたりの友情物語。

## 『あなたは「三光作戦」を知っていますか』

日本にも戦争があった2』

坂倉 清・高柳 美知子／著 新日本出版社  
(2007年)

三光作戦とは日本軍が中国の華北で行った掃討作戦のことです。その作戦の残酷さを、中国側が「殺光(殺しつくす)」「焼光(焼きつくす)」「創光(奪いつくす)」と呼んだことから、「三光作戦」と呼ばれるようになりました。

元日本兵士の証言者、坂倉清さんは昭和十五年から昭和二十年の八月の敗戦に至るまで、日本侵略軍兵士として数えきれないほど残酷非道な罪を重ね、多くの中国人民を殺しました。日本兵がいくら戦争とはいえ、なぜこんなにも残忍な行為ができたのでしょうか？

## 『母と子でみる 32 アジアの戦争被害者たち』

証言・日本の侵略』

伊藤 孝司／写真と文 草の根出版会 (1997年)

この本は、写真家の伊藤さんが、日本から戦争被害を受けたアジアの方々を取材したものです。祖国から強制連行され望まぬ仕事をさせられた方、戦場で家族や友人を亡くした方、戦争で受けたひどい仕打ちに心身に傷を負った方など、戦争が、その時代その場所で生きている人にどういうことをもたらすのか、写真と文が語ります。